

小論文の指導 その3

－二段落からの展開－

金子 泰子

キーワード：短期大学幼児教育科「国語」、短作文指導からの発展、
段落接続、主題の確定、アウトライン作成

要旨

短期大学幼児教育科の「国語」という科目で文章表現指導を長く続けた。試行錯誤からはじめて、まず、短作文での基礎技能訓練の体系化を考えた。次に、その短作文の練習を前半に効率よく配置して、後半に小論文指導を連携させる半期の授業を組み立てた。半期に短作文と小論文指導を組み込むという時間的制約がなかなか突破できず苦しい思いを抱き続けた。しかし、その制約があったために、短作文指導の成果を活用しながら、小論文指導を有機的に連携させる工夫をし、また、学生同士グループ毎に行う合評会を活用するなど、いくつかの点で効果的な指導法が見いだせた。

本論では、長年の懸案であった短作文から長作文への発展指導の一案として、二段落を核として全体の構想を練り、八百字の小論文に展開した指導の一例を示す。

1. これまでの研究経緯

半期の文章表現指導期間を通して、途中三回のアンケート調査を組み込みながら実践を続けてきた。開講初期、短作文指導終了時の中期、小論文指導終了時の終期の三回にわたって受講生対象に行ったアンケート分析の詳細についてはすでにそれぞれに発表した。(注1) これによって問題点として明確になってきたことは、終期のアンケート分析「小論文の指導 その2」に述べた次の部分である。

少しずつ階段を上るように、徐々に書き慣れる効果は大きい。学生の記述から、二百字作文での指導効果が確認できた。しかし、同時に、二百字と八百字をつなぐ指導が欠けていることが明らかになった。・・・中略・・・

二百字から一挙に八百字に移ることへの戸惑いを指摘する学習者の記述内容から、二百字（一段落）作文の次には、四百字（二段落）作文を、その次には六百字（三段落）作文を、さらには八百字（四～六段落）作文をと、ステップを踏みながらの丁寧な指導が必要なこと気づいた。二百字で一つのまとまりを持った段落がしっかりと書けるようになったら、次は、段落相互の関係性を確認しながら、内容を積み上げていかなければならない。段階を追いながら繰り返す、という指導の基本に気づいたことは、今回のアンケート分析の中でも大きな成果の一つである。

短作文を活用して書き慣れ、技術を身につけながら書くことの楽しさを理解させることにはある

程度成功したが、小論文をきちんと書き上げる自信を与えるまでには至っていないことは、学生のアンケートへの記述が明らかにしている。二百字と八百字をつなぐ段落相互の関係性とその接続の指導がこの問題を解く鍵であろう。

上記の研究経緯を受けて考案したのが、本論で取り上げる二段落から展開する小論文の指導である。

2. 指導手順と学生作品例

二百字に代表される短作文では、分かりやすさを基本に、効果的な表現の手法に関する基礎的な訓練はできた。しかし、小論文の場合は、あるまとまった思想を、いくつか段落を積み重ねて表現する必要がある。一文ごとの接続関係のみならず、全体を見通した上での段落間の関係性やその接続方法に配慮しなければならない。

ここで問題になるのは、テーマ（主張）の確定である。テーマが明確になってはじめて手段も方法も考案できる。しかし、短大生を始めとする、文章作成になれない学習者の場合は、材料探し、テーマの確定、執筆作業が、たいていの場合、同時に進行する。書きながら見つけ、書きながら考えるのが実情で、完成稿として提出される文章の多くは、構想過程半ばの覚え書きと言えるものがほとんどである。

このような学生のための指導の手だてとして考えたのが、すでに書き慣れた一段落作文（二百字字数制限作文）を活用して、まず段落を二つ（二百字作文を二つ）書き、それを対比させるところからテーマを明確にし、その上で三段落、四段落へとふくらませて、最終的に八百字程度の小論文を書き上げる方法である。

二百字作文の指導の際も、指導のポイントに変化を加えながら繰り返し練習した。同様に、四百字作文も、学生の日々の生活の様子や講義内容とも関連させながら、次の三つの課題で二段落作文の練習を三回繰り返し、その上で八百字につなぐ指導を行った。

課題一 「短大生生活」（学習のねらい：二つの段落の内容を明確に書き分ける）

課題二 「食事」（学習のねらい：テーマの見当をつけて副題をつける）

課題三 「敬語」（学習のねらい：主題文を書き、アウトラインを作成する）

二つの段落に、反対の内容や変化のある内容を書き込み、それらを対比することによって、テーマが見いだせるように導いた。

課題一の場合の二段落間関係については、「高校時代に抱いていた理想の短大生と現実の短大生」、「就職した友だちの生活と短大に入学した自分の生活」、「学校での自分とアルバイト先での自分」、「短大生活の楽しい部分とつらい部分」、といった対比構成と、「短大生になってからの具体的な体験談とそれについての解説や意見」、「短大生に関する一般論とそれに対する反証（実証）例」といった段落構成を解説して、指示した。

課題二、三についても同様の解説を行ったが、短作文の指導と同様に課題毎に異なる学習のねらいを与え、直前の課題練習で確認できた問題点を指摘しながら、次の課題で同じ過ちを起こさないように注意すると同時に、二段落による構成の多様性に気づかせる努力

をした。

以下、指導の手順に沿って、その時々提出された学生の作文を例示しながら、二段落作文の指導過程について述べる。

2-1. まず核になる二段落を書き分ける

課題一の作業では、学習のねらいを「二つの段落の内容を明確に書き分ける」こととした。その結果出来上がったものが次の例である。

課題一 「短大生生活」二段落作文例文 学生A

短大生生活－外見も中身も変わった私－

高校生の頃の私は、真面目で遅刻も早退もましてや欠席などしたことがなかった。校則が厳しかったせいもあるが、髪は黒くきちっと結ってあって、スカートも長く、くつ下はピチッとした短いやつ。もちろん化粧だって、学校にして行ったことはなかった。高校に入学してからずっと「私は頭が悪いんだから真面目なところだけは守ってゆこう」と心に決めて、朝、鏡を見ながら髪を結び、心でそうつぶやいて毎日早い電車に乗っているだけで十分だった。

それが、今ではどうだろう。短大生になって、朝早く起きるのは、電車に乗り遅れたら単位がもらえなくなってしまうからであって、高校生の頃のように、気持ちを引き締めるためではない。そして早起きの一番の理由は、化粧をするためだ。春休み中に少し化粧したら、高校の友だちはみんな口をそろえて「変わったね。きれいになったね」と驚いたように言う。私は、それがうれしくてたまらない。今、何をしても満たされない私は、今日も厚化粧だ。

二段落目の書き出し「それが、今ではどうだろう。」は、一段落目の内容との対比関係を際立たせる上手な関係づけである。二百字作文では段落間に位置する文の接続方法の指導は不可能だった。二段落構成だからこそ取り立てて指導できる項目である。

課題一での指導ポイントは、二つの段落の内容をきちんと書き分けることに絞り、今後の構成指導に不可欠の段落意識の強化に努める。

内容が書き分けられない学生には、「通信」や取り立て解説での一斉指導に加えて、教室内での個別面談や赤ペンで個別指導を行った。なお、段落間のつながりがうまくできない学生に関しては、一回目の練習では、内容が書き分けられていれば良しとし、次回から、段落どうしの意味的関連を考えつつなぎを工夫するように、一斉指導と個別指導で対応した。

2-2. テーマの見当をつけて副題をつける

課題二「食事」では、「テーマの見当をつけて副題をつける」という新たな学習のねらいを提示して、課題一同様に二段落の書き分けを行わせた。

課題二 「食事」二段落作文例文 学生B

－いつもはおいしいはずなのに－

大好きなバーミヤン。私はワクワクしながら桃の看板を目指した。知り合いと二人で行ったのだが、その人と食事をするのは初めてだった。到着して早速メニューを開き、私はレタスチャーハン、その人は皿うどんを注文した。さすがファミレス、驚くほど早く料理が来た。すると

その人はサッとテーブルの上の紙ナプキンを1枚手に取った。何をするのかと思っていると、少し食べては口を拭いて、また少し食べては拭くのを繰り返した。楽しい会話もない。何だか急にチャーハンがまずくなつてのどを通るのがやっとだった。

それに比べ、気の合う仲間との昼食はなんとおいしいことか。それがたとえコンビニのおにぎりだろうが、おぼちゃんの愛情こもった学食ならなおさら。もっとおいしい。やはりマナーを気にして嫌いな人と食べるのは最悪だ。一人で食べる方がまだましだと思った。今度は気の合う仲間とバーミヤンに行きたい。

この学生は、二百字作文の練習の時から、短文でテンポよく文章が綴れた。一段落目にそれがよく示されている。臨場感あふれる描写である。

段落間のつながりも対比の意味が明確で、二段落目のトピックセンテンスになるうるもので読みやすい。ただし、後続文は、トピックセンテンスを十分支持するものにはなっていない。しかし、この段階で、学習のねらい以外の細かな指導は行わない。このあと、最終稿の提出までに、自分で訂正するチャンスが十分にある。

「いつもはおいしいはずなのに」、なぜ、この時はおいしくなかったのか。クラス内で発行している「通信」で紹介しながら、読者の意見を出し合い、テーマの確定と今後の展開に役立てられるように努めた。一段落目の描写に関しては、通信を読んだ他の学生から、状況が見えるようだとの好意的な意見が多く出された。

ここでの赤ペンによる指導者のアドバイスは、「マナーは必要ないのか」、「おいしく食べられるマナーとはどんなものか」「マナーとは本来、周りに不快感を与えないで快適に過ごすためのもの」などで、引き続き自分で考えを深めるためのヒントを与えた。

課題一で戸惑った学習者も、二回目になると要領がつかめて、内容の書き分けができるようになる。対立、対比による内容の取り上げ方も様々で、二百字では味わえない文章表現の広がりが楽しめる。

学習のねらいとして与えた副題付けは、二百字での練習の時から続いているので、課題一の時点からどの学習者も忘れず付けている。二つの段落と学習者のつけた副題が手元にあると、何を書きたいのか、方向性がつかめ、指導が楽になる。

課題二からは、主題文の作成やアウトラインを考慮した上での講評を行う。後の八百字への展開が負担にならないように、見通しを立てさせるためである。通信で紹介する際には、副題と本文と同時に、次のねらいである主題文とアウトライン案を指導者が作成し、一例として示した。

タイトル 「食事」

副題 ーいつもはおいしいはずなのにー

主題文案 「食事マナーは、相手も自分も気持ちよく、おいしく食べるためのものだ」

アウトライン案

1. おいしくなかった食事の例（相手のことを考えない、不快で極端なマナー）
2. 気楽でおいしい食事の例（最低限のマナーはあるが）

3. 食事のマナーってなんだろう。(互いが気持ち良く、おいしく食べるためのもの)
4. まとめ

2-3. 主題文を書き全体の構成を考えてアウトラインを作成する

課題三「敬語」では、新たな学習のねらい「主題文を書き、アウトラインを作成する」を加えて、二段落での積み上げ練習を継続する。作文は二段落四百字であるが、アウトラインは八百字に展開した場合のものである。

課題三「敬語」二段落作文例文 学生C

タイトル 「敬語」

副題 -敬語は潤滑油だ-

主題文「敬語は人間関係の便利な潤滑油である」

アウトライン

1. 先輩への言葉遣いとその時の気持ち
2. 後輩からの言葉遣いとその時の気持ち
3. 1. と 2. から分かること
4. まとめ

-敬語は潤滑油だ／生活を円滑にする-

私は高校3年間、バンドをやっていた。他のバンドの先輩に敬語を使うと、先輩もうわべだけかわいがってくれる。付き合いなのだからしかたない。「りょうさん、すごいですね。まじ、憧れですよ」敬語らしい敬語ではないが、とりあえず使う。「今度、見に来てよ」と言われると、「はい、ぜひ」とは言うが、行ったためしはない。敬語を使うことにより、うわべだけでも仲良くなれるのだから、とても便利である。

私が上の立場になる時もある。ライブハウスで、4つのバンドが出て2つが後輩の時は気分がいい。「そのさん(学生Cの名前)、お疲れ様でした。良かったっすよ」少し偉くなった気分だ。あまり敬語を使われるのは好きではないが、全く使われないのもいやだ。勝手なものだ。後輩はどう思っているのだろうか。私と同じで、とりあえず便利だから敬語を使っているのだろうか。敬語というものはとても便利だと思ったバンド人生だった。

副題は、並立表示で、アウトラインで書いてある「敬語は潤滑油だ」には決定されていない様子だ。文章を綴る際にタイトルを付けることは、文章全体の方向を確認するという観点からも非常に有効で、構想を練る際の指針となる。三段落目にどのような内容が盛り込まれるか楽しみなアウトラインである。すでに、アウトライン3., 4.のトピックセンテンスにも相当する二文が最後に加わっている。

いよいよ次の学習のねらいは、主題文とアウトライン作成をもとに八百字の意見文に書き上げることである。これまでに提出された課題一、二、三の二段落作文を通信で紹介する際にも、すでにアウトラインの解説指導を行ってきたが、各段落内の詳しい内容までは示さず、学生の文章に沿って大まかな方向性を示すに止めてきた。そのため、例示したア

ウトラインは、1. と 2. に二段落をそのままの順で使ったものが多いが、ほかにもいろいろな使い方があることを解説で言及した。例えば、1. で敬語に関する日ごろの考え(面倒だ、難しい、無ければいい、など)を書き、二段落作文は 2. 3. に組み込んで、4. で 1. との照応を図りながらまとめを述べるなどの構成である。

なお、課題三がおわる段階で、この学期以前の先輩受講生の意見文の中から、説得力ある八百字小論文を通信で紹介し、アウトラインのバリエーションにも言及した。一つのきまったアウトラインではなく、学習者なりの展開にチャレンジさせる意図を持ってである。

2-4. 八百字作文(小論文)を書き上げる

いよいよ、二段落から八百字への展開である。これまで三回書いた二段落作文の中から、自分がかつとも気に入って、八百字に展開してみようと思うものを一つ選んで、副題、主題文、アウトライン作成をして、八百字に書き上げるよう指示した。

以下が上記のABC3名の学習者の八百字第一次草稿である。(なお、括弧内の○数字は、後の3-1. で示すアンケートの回答者番号と合致している。)

学習者A(◎)課題一による八百字小論文第一次草稿

タイトル 「短大生生活」

副題 -外見も中身も変わった私-

主題文 「高校時代のまじめさを取り戻したい」

アウトライン

1. 高校時代の私のまじめっぷり
2. 短大生の私の姿
3. 本当の私はこんなじゃない(今も楽しいけど、高校時代のまじめさを取り戻したい)
4. 学会祭のスタッフをやって得たもの
5. 目的のあるときの満たされた私とこれからの私のまとめ

高校生の頃の私は、まじめで遅刻も早退もましてや欠席などしたことがなかった。校則が厳しかったせいもあるが、髪は黒くきちっと結ってあってスカートも長く、靴下はピチットしたやつ。もちろん化粧だって、学校にして行ったことはなかった。高校に入学してからずっと「私は頭が悪いんだからまじめなところだけは守ってゆこう」と心に決めて、朝、鏡を見ながら髪を結び、心でそうつぶやいて毎日速い電車に乗っているだけで十分だった。

それが今ではどうだろう。短大生になって朝早くおきるのは、電車に乗り遅れたら単位がもらえなくなってしまうからであって、高校生の頃のように気持ちを引き締める為ではない。そして早起きの一番の理由は、化粧をする為だ。春休み中に少し化粧をしたら、高校の友だちはみんな口をそろえて「変わったね、きれいになったね」と驚いたように言う。私はそれが嬉しくてたまらない。今、何をしても満たされない私は今日も厚化粧だ。

短大に入学して少し過ぎた頃、友だちと二人で買い物に行った時、始めてナンパされた。その時は、うれしくてなんとなく自分に自信がついた様な気がした。それからすこし過ぎて、学校の帰りに一人で駅を歩いていたらナンパされたが、その時、うれしいとかの感情よりも、ただ恐ろしくて走って逃げた。その日の夜、私は眠れずに、ずっと考えていた。私は、外見だけ

で、中身が空っぽなのではないか。私はナンパされて喜んでいるような人間ではないはずだと、少し悲しくなって、今の自分と高校の頃の自分を比べていた。

私は、学海祭のスタッフをやっている。とにかく私は必死になってもくもくと仕事に取り組んでいた。当日、知らない男の人が私に「頑張ってるね、一年生でしょ。」と声をかけてきた。その時私は無視してしまったが、一番最後の企画の先輩方への花束を渡したとき、同じ短大の知らない先輩やスタッフの先輩に「頑張ったね」と声をかけてもらった時、やっと高校の自分と今の自分がきれいに重なった気がした。高校の自分を取り戻せた。

まだまだ段落間の関係があいまいで無駄な部分も多く、まとめも弱いですが、考えが徐々に展開する様子が確認できる。八百字を書き上げたことを評価した上で、推敲時の参考になるアドバイスを赤ペンで与えた。

まとめを「化粧や外見だけで人目を気にしても満足感は得られない。充実した時間が本当の喜びにつながり、自信にもなる」として見てはとアドバイスした。その傍らに、自らの字で次のようなまとめ文が付け加えてあった。「オシャレだといわれて喜んでいる私に満足感はけっしてなく、充実した時間が本当の喜びにつながり、そして自信にもなって、私になっていく。」

推敲の時間は十分に与えた。次の授業には、学習者同士の合評会による総仕上げの時間を設定し、推敲と清書に力が入るように仕組んだ。

学習者B(㉔)課題二による八百字小論文の第一次草稿

タイトル 「食事」

副題 ーいつもはおいしいはずなのにー

主 題 文 「適度なマナーは人を快くさせるが、度が過ぎると不快にさせる」

アウトライン

1. 不快だった度が過ぎるマナーの話
2. 普段の楽しい昼食の話
3. マナーと一緒に食べる人によって使い分ける。間違えると不快を与える。
4. やはり自分の好きな食べ方が一番。食事のマナーは必要最低限で十分。

大好きなバーミヤンで食事。私はワクワクしながら桃の看板を目指した。知り合いと二人で行ったのだが、その人と食事をするのは初めてだった。到着して早速メニューを開き私はレタスチャーハンを、その人は皿うどんを注文した。さすがファミレス、驚くほど早く料理が来た。するとその人は、サッとテーブルの上の紙ナプキンを一枚手に取った。何をするのかと思ってみると、皿うどんを少し食べては口を拭き、また少し食べては拭くのを繰り返した。ひたすら会話もなく食べ続ける。何だか急にチャーハンがまずくなって、のどを通るのがやっとだった。

それに比べ、気の合う仲間と昼食はなんとおいしいことか。それがたとえローソンのシーチキンおにぎりだろうが学食で一番安いライス、みそ汁、おそうぎいの二百円セットだろうが。学食はおばちゃんの愛情がこもっているからなおさらおいしい。マナーを気にする必要もない。あえてするとしたら、汚らしく食べないという程度の基本的なことだ。

前例の2つの対照的な食事の風景を思い出してみても分かったことがある。マナーと一緒に食べる人によって違うということだ。あまり親しくない人には自分を良く見せようとして普段よりマナーに気を使う。この時マナーを気にしすぎるとかえって他人行儀で嫌味な感じを与える。本来マナーは人を快くさせるものなのに、一歩使い方を間違えるととんでもなく不快にさせてしまうのだ。

ここまで来て最後に思ったのは、見栄を張って失敗するよりもありのままの自分の食べ方で食べる方が一番おいしいということだ。私は相手が気の許せる仲間だったら、少々マナーに欠ける食べ方でも気にならない。むしろ、自然体の自分を見せてくれたようで嬉しい。これでもっと仲が深まるのなら食事のマナーは最低限で十分だと思う。

二段落目、前回と比べると構文も内容もトピックセンテンスに見合うものに整っている。

三段落目は、一、二段落を対比しての意見がまとめられている。つなぎの文も分かりやすい。「マナーと一緒に食べる人によって違うということだ」という新たな気づき加わった。まとめをどうするか、指導者のアドバイスと推敲の時間を活用して、最終稿はあくまで本人に任せる。

学習者C (㉒)課題三による八百字小論文第一次草稿

タイトル 「敬語」

副題 「敬語は便利」

主 題 文 「敬語は人間関係の便利な潤滑油である」

アウトライン

1. 先輩への言葉遣いとその時の気持ち
2. 後輩からの言葉遣いとその時の気持ち
3. 1. と2. から分かること
4. まとめ (主題につながるまとめ)

私は高校3年間、バンドをやっていた。他のバンドの先輩に敬語を使うと、先輩もうわべだけかわいがってくれる。付き合いなのだからしかたない。「りょうさん、すごいですね。まじ、憧れですよ」敬語らしい敬語ではないが、とりあえず使う。「今度、見に来てよ」と言われると、「はい、ぜひ」とは言うが、行ったためしはない。敬語を使うことにより、うわべだけでも仲良くなれるのだから、とても便利である。

私が上の立場になる時もある。ライブハウスで、4つのバンドが出て2つが後輩の時は気分がいい。「そのさん、お疲れ様でした。良かったっすよ」少し偉くなった気分だ。あまり敬語を使われるのは好きではないが、全く使われないのもいやだ。勝手なものだ。後輩はどう思っているのだろう。私と同じで、とりあえず便利だから敬語を使っているのだろうか。

私がうわべだけだと思っていれば、少なくとも相手には分かるはずだ。それは、私が後輩と会話する時に少し感じることなのだから。しかし、すべてがウソではない。うわべだけではない。尊敬している所もあるから出てくる言葉である。「年上」というだけで、少しオーバーにほめ、敬語を使う。私も後輩からそう思われていたい。まったくのウソでの敬語はつらいものがある。

敬語というものは、人間関係がわりとはっきりしてくるものである。便利というだけでは使いきれない大切さがあるということがわかる。そこで、人との深い関係が少しずつでも生まれて来ると期待も少しはあるだろう。敬語を使い、その時の気持ちと、相手に敬語を使われた時の気持ちは全く違う。この人間関係を上手に使うことにより、正しい敬語、使われて嬉しい敬語と、いろいろ分かってくるだろう。一方的ではいけない。実際に体験をし、学んでいくことにより、「便利」が上手に使えるようになってくるのではないかと思う。

アウトラインを作成し、本文を八百字書き切ったことを、まず十分にほめる。三段落目、四段落目と考えが深まっているので、主題文は「敬語は一方的な人間関係ではいけない。体験しながら上手に使えるようになる」ではないかと考えるヒントを与え、全体をもう一度考えるようにとアドバイスした。

指導者の理解と学習者の思いがずれることも起こりうるが、最終的には学習者が納得する範囲で、書き手自身により深く、継続的に考えさせる指導を心がけている。文章は作成過程が重要である。自分で考えて、それを文章にする経験を何度も繰り返す。指導者の役割は、その環境を整えることである。

2-5. 推敲から仕上げ、そして学習者同士の合評会開催へ

八百字を仕上げた後、上記の指導を受けて推敲し、仕上げた合評会に臨んだものを以下に例示する。推敲後の変化については、指導内容とも関連させながら、それぞれの例示の後に考察を加えた。

学生A(◎)推敲後の八百字小論文

タイトル 「短大生生活」

副題 「外見も中身も変わった私」

主題文 「高校時代のまじめさを取り戻したい」

アウトライン

1. 高校時代の私のまじめっぷり
2. 短大生の私の姿
3. 本当の私はこんなじゃない（今も楽しいけど、高校時代のまじめさを取り戻したい）
4. 学海祭のスタッフをやって得たもの
5. 目的のあるときの満たされた私とこれからの私のまとめ

人目を気にしても満足感は得られない。充実した時間が本当の喜びにつながり自信にもなる。

高校生の頃の私は、まじめで遅刻も早退もましてや欠席などした事がなかった。校則が厳しかったせいもあるが、髪は黒くきちっと結ってあってスカートも長く、靴下はピチッとしたりやつ。もちろん化粧だって、学校にして行ったことはなかった。高校に入学してからずっと「私は頭が悪いんだからまじめな所だけは守ってゆこう」と心に決めて朝、鏡を見ながら髪を結い心でそうつぶやいて毎日早い電車に乗っているだけで十分だった。

それが今ではどうだろう。短大生になって朝早くおきるのは、電車に乗り遅れたら単位がも

らえなくなってしまうからであって、高校生の頃のように気持ちを引き締める為ではない。そして早起きの一番の理由は、化粧をする為だ。春休み中に少し化粧をしたら、高校の友だちはみんな口をそろえて「変わったね、きれいになったね」と驚いた様に言う。私はそれがうれしくてたまらない。今、何をしても満たされない私は今日も厚化粧だ。

短大に入学して少し過ぎた頃、友だちと二人で買い物に行った時、始めてナンパされた。その時は、うれしくてなんとなく自分に自信がついた様な気がした。それから少し過ぎて、学校の帰りに一人で駅を歩いていたらナンパされたが、その時、うれしいとかの感情よりも、ただ恐ろしくて走って逃げた。

その日の夜、私は眠れずに、ずっと考えていた。私は、外見だけで、中身が空っぽなのではないか。私はナンパされて喜んでいる様な人間ではないはずだ。と。少し悲しくなって、今の自分と高校の頃の自分を比べていた。

私は、学海祭のスタッフをやっている。とにかく私はできる仕事をもくもくと必死に取り組んでいた。ひたすら仕事をしていたら、いつの間にか学海祭当日になっていた。当日三日間、ずっと走り回っていて、くたくただった最終日。一番最後の企画で先輩方へ花束を渡した。その時、スタッフの先輩方が、泣いている私に「頑張ったね、ゆかりが頑張ってくれたから助かったよ」と声を掛けてくれた。が、知らない同じ短大の先輩まで、肩をたたいて「頑張ってたね、おつかれ」と声を掛けてくれた。私は胸がいっぱい、くたくたの体が、何かで満たされていることに気づいた。やっとからっぽだった中身が満たされ喜びに震えた。

3、4の段落分けて読みやすくなり、5でも多少無駄が省かれた。しかし、まだまだ整理の余地がある。4と5の段落間の接続関係がはっきりしない。6の段落を作り、まとめを独立させる必要もあるだろう。

学習者B(㊟)推敲後の八百字小論文

タイトル 「食事」

副題 —いつもはおいしいはずなのに—

主 題 文 「適度なマナーは人を快くさせるが、度が過ぎると不快にさせる」

アウトライン

1. 不快だった度が過ぎるマナー
2. 普段の楽しい昼食
3. 親しき仲にも礼儀あり
4. マナーと一緒に食べる人によって使い分ける。間違えると不快を与える。
5. やはり自分の好きな食べ方が一番。食事のマナーは必要最低限で十分。

食事—いつもはおいしいはずなのに—

大好きなバーミヤンで食事。私はワクワクしながら桃の看板を目指した。知り合いと二人で行ったのだが、その人と食事するのは初めてだった。到着して早速メニューを開き私はレタスチャーハンを、その人は皿うどんを注文した。さすがファミレス、驚くほど早く料理が来た。するとその人は、皿うどんを少し食べては紙ナプキンで口を拭くのを繰り返した。楽しい会話もない。何だか急にチャーハンがまずくなり、喉を通るのがやっとだった。

それに比べ、気の合う仲間との昼食はなんとおいしいことか。それが例えローソンのシーチキンおにぎりだろうが学食で一番安いライス、みそ汁、おそうざいの二百円セットだろうが。学食はおばちゃんの愛情がこもっているからなおさらおいしい。マナーを気にする必要もない。

しかし、マナーを気にしなすぎるのも困る。ごちそうさまの後で茶碗に米粒がこびりついていたらどうだろう。何か汚らしいし、そこまで食べたのなら最後まできれいに食べたなら？と思ってしまう。親しき仲間にも礼儀ありとはよく言ったものだ。

前例の2つの対照的な食事の風景を思い出してみても分かったことがある。マナーと一緒に食べる人によって違うということだ。あまり親しくない人には自分を良く見せようとして普段よりマナーに気を使う。この時マナーを気にしすぎるとかえって他人行儀で嫌味な感じを与える。本来マナーは人を快くさせるものなのに、一歩使い方を間違えると思いがけず不快にさせてしまうのだ。

ここまで来て最後に思ったのは、見栄をはって失敗するよりもありのままの自分の食べ方で食べるのが一番おいしいということだ。私は相手が気の許せる仲間だったら、少々マナーに欠ける食べ方でも気にならない。むしろ、ありのままの自分の姿を見せてくれたようで嬉しい。これでもっと仲が深まるのなら食事のマナーは最低限で十分だと思う。

段落間のつながりがなめらかである。考えも深まり、3段落目が加わって説得力もついた。最後の段落のまとめがあいまいで、テーマとずれる部分がある。もう一度推敲の必要があるが、今回はここまでであった。

学生C(㉑)推敲後の八百字小論文

タイトル 「敬語」

副題 「敬語は便利」

主題文 「敬語は人間関係の便利な潤滑油である」

アウトライン

1. 先輩への言葉遣いとその時の気持ち
2. 後輩からの言葉遣いとその時の気持ち
3. 敬語はうわべだけのウソか。
4. 敬語で人間関係がはっきりする
5. 一方的ではなく、体験をしながら上手になる

私は高校3年間、バンドをやっていた。他のバンドの先輩に敬語を使うと、先輩もうわべだけでかわいがってくれる。付き合いなのだからしかたない。「りょうさん、すごいですね。まじ、憧れですよ」敬語らしい敬語ではないが、とりあえず使う。「今度、見に来てよ」と言われると、「はい、ぜひ」とは言うが、行ったためしはない。敬語を使うことにより、うわべだけでも仲良くなれるのだから、とても便利である。

私が上の立場になるときもある。ライブハウスで、四つのバンドが出て二つが後輩の時は気分がいい。「そのさん、お疲れ様でした。良かったっすよ」少し偉くなった気分だ。あまり敬語を使われるのは好きではないが、全く使われないのもいやだ。勝手なものだ。後輩はどう思っているのだろうか。私と同じで、とりあえず便利だから敬語を使っているのだろうか。

私がうわべだけと置いていけば、少なくとも相手には分かるはずだ。それは、私が後輩と会話する時に少し感じる事なのだ。しかし、すべてがウソではない。うわべだけではない。尊敬している所もあるから出てくる言葉である。「年上」というだけで、少しオーバーにほめ、敬語を使う。私も後輩からそう思われていたい。まったくのウソでの敬語はつらいものがある。

敬語というものは、人間関係がわりとはっきりしてくるものである。便利というだけでは説明しきれない複雑さがあるということがわかる。そこで、人との深い関係が少しずつでも生まれてくるという期待も少しはあるだろう。

敬語を使う時の気持ちと、相手に敬語を使われた時の気持ちは全く違う。この人間関係を上手に使うことにより、正しい敬語、使われて嬉しい敬語、その場に合った使いたい敬語と、色々分かってくるだろう。一方的ではいけない。実際に体験をし、学んでいくことにより、「便利」が上手に使える様になってくるのではないと思う。

第一次草稿と大きな変化はないが、推敲後に最後の段落内の構文上の乱れが訂正され、「その場にあった使いたい敬語」が加わった。主題文や副題も内容の変化に合わせて書き換えができればよかったが、まだ、書き上げるのに精一杯のようだ。しかし、段落が加わる毎に考えが展開した学生であった。

3. 今回の指導を受けた学習者へのアンケート調査

上記の小論指導の後、推敲をして清書した小論文を元に学生同士でグループ合評会を行った。その後で、「二段落（四百字）から八百字に展開する今回の小論文の指導法についてどう思いましたか。」というアンケートに答えてもらった結果が次のとおりである。

3-1. 41名の学習者のアンケート回答文と分析

（受講生全41名、①～④①。A・B・C*は本論で例文として取り上げた学習者）

① 合評会欠席

② 文が長くなると何を伝えたいのかなどわからなくなってきたりして困った。長い文を書くのは大変だったけど、がんばって書けた。 ・取材

③ 二百字作文でも考えながら頭をひねってやっと書いてほっとしていた矢先に、次は四百字から八百字、「うそでしょうー」と思った。でも、今は作文が苦手だった私が、これだけうまく書けたことにびっくりした。それと、風景を見てそのまま作文にするのはとてもおもしろかったし、「金メダル」に載ったのはうれしかった。（楽しかった。バイバイ。イラスト入り一筆者注） ・取材 ・構成

④ 四百字から八百字へはとても書きやすかったです。何回も文を書いていく中で、文を書くということに抵抗がなくなり、楽しくなりました。ありがとうございます。 ・指導法 ・書き慣れ

⑤ 最初から八百字にするのは、何だかゴチャゴチャしてくるし、書いていても疲れてくるけど、四百から八百にするのは、とてもやりやすいです。よし書こうという気持ちになりました。けっこういいと思います。 ・指導法 ・書く姿勢

⑥ 二段落から四段落に変えても同じようなことの繰り返しになってしまった。多すぎて書きづらかった。どうしても何回も同じ事を書いてしまう。（四つの段落は、1. 入学前のイメージ 2. 入学してからの現実 3. 1と2を比較して、今の問題点をあげる 4. これからどうすればよいか という

ふうとうまくまとまりができています。欠席が多く、授業に出なかった事への不安感の表れか。・・・筆者注)
・指導法(一) ・構成

⑦ 四百字まではなんとか書けるのだけれどそこからの展開が難しくてかなり苦労した。文もまとまりのあるものが書けなかった。今度八百字の作文を書く機会があったら、アウトラインをもっと工夫あるものにしたい。(合評会を経験することにより、自分の文章の良い点も確認できて、次への意欲がでている。・・・筆者注)
・指導法(一) ・構成

⑧ 最初二百字作文は難しかったけど、自然と四百字書けたので、自分でびっくりした。四百字から八百字へ行くとき、もとの四百字をもとに書いたのがやっぱり難しく感じた。(四百字の作文の段階でテーマが明確にできなかったので、八百字への移行がスムーズに進んでいない。これは単純にまとめられる内容ではなかった事が原因で、アウトライン時の指導が不足していると見られる。・・・筆者注)
・指導法 ・選材 ・構成(一)

A*⑨ すごく難しかったが、書き方がわかったし、一度書いた文がどんどんふくらむのが楽しかった。文を書くのは難しかったが、書くことが沢山出てきておかしかった。 ・構成 ・指導法 ・取材

⑩ 一回目の下書きでは無駄が多く文章が伸びてしまっていたところも、二回目に書いたことによって言いたいことも明確になってくるし、無駄なところも省けたりしてよいと思う。長くもなく短くもなく少し難しかった。何度も書くことでこう書けばいいとか自分で分かってよい文が書けるようになると思う。
・推敲 ・書き慣れ

⑪ 四百字のものを八百字にするのはとってもよかった。自分の考えが少しはできているので、そこからつけたしたりけずる事ができたので落ち着いて書けたように思う。
・指導法・取材・選材・書く姿勢

⑫ 短い作文だと書きやすかったが、小論文だと頭の中でどうしても長く書かなければいけない感じがして、一つ一つの段落がまとまらず二段落作文を書いた意味がなくなりました。(始めの二段落での比較と詳述は非常にうまく書けるが、問題点を探り出して解決策を具体的に提示するところまで進めなかった。出席率はよい。・・・筆者注)
・構成(一) ・段落(一)

⑬ 四百字から八百字というのはとてもいいやり方だと思う。慣れてきたころに八百字に移って、苦勞しなかったと言えばウソになるが、長く書くということにもあまり抵抗なく書けた。
・指導法 ・取材

⑭ 順序よくステップアップしていくとこんなに成長したのかと、自分でもびっくりした。八百字なんて無理だとあきらめていた自分がどこかに行ってしまったかのように、少し自信が持てた。この授業は私向きでベストだった。
・指導法 ・取材 ・書く姿勢

⑮ 私はすごく作文が苦手で、長い文章などろくに書けたことがなかったので、この四百字を八百字に広げるというやり方は私にとって書きやすかった。四百字書くのはすごく嫌だったが、それを八百字にするのはスラスラできたので、不思議だった。
・指導法 ・構成

⑯ 作文を書くのはすごく難しく嫌だった。一つの作文を書くのに最初はとても時間がかかったけど、今は前よりも書くのが早くなったのでよかったと思う。(欠席多い。合評会欠席。感想のみ。・・・筆者注)
・取材 ・書く姿勢 ・書き慣れ

⑰ 今回のように小論文を書いたのは初めてでしたが書きやすかったです。もう四百字書いてあるものを元にそれにいろんなものをくっつけて作るのでもとめやすかったです。小論文に自分の体験したことを多く入れることができたのでよかったです。
・指導法 ・取材 ・構成

- ⑱ どうしていいかわからないところもあったけど、けっこう楽しかった。二百字以内に書くというところは一番伝えたいところがなかなかまとまらなかったのが苦労した。
・書く姿勢 ・構成
- ⑲ 私は、金子先生の授業を受ける前までは、本当に「やだな」「書きたくない。」と思っていました。だけど、先生の授業で文を作ることが楽しくなりました。四百字から八百字になっても、先生から「こんな段落で書いてみてください」という説明があって、八百字書くのも楽しかったです。
・書く姿勢 ・指導法 ・構成
- ⑳ 四百字から八百字にするのは難しかったけれど、アウトラインを決めてやったので、ちょっとだけ難しかっただけだった。
・構成
- C*㉑ 二百字から四百字、八百字にするというのは大賛成です。急に長い文なんて書けないので、少しずつ増やしていったので書きやすかったです。先生の国語で作文が好きになりました。
・指導法 ・構成 ・書く姿勢
- ㉒ 記述なし
- ㉓ 何もなくていきなり八百字を書くというよりは、はじめに四百字で書いていた方がよかったけど、文をつけたさなきで何を書けばいいのかいっばい悩んだ。
・指導法 ・取材
- ㉔ 初めの頃は、二百字でどうまとめていいかわからない事がたくさんあった。だんだんと続けていくうちに、二百字でさえ苦痛だったのが、すんなりと（四百字二段落・・・筆者注）書けるようになっていったのですごいと思った。八百字では、少し大変だったけど、前に比べたら自分なりに成長したと思った。四百字では、違いを書くのに戸惑った。二百字から四百字の二段落作文になったので少し大変だった。
・書き慣れ ・構成(-) ・自己評価力
- ㉕ 「二百字作文を書いてください」といわれたとき、難しくて全然書けなかったのが今では特に気にもならず書けるようになりました。かんちがいしてしまってこの小論文も二段落にしてしまいました。（欠席多・・・筆者注）
・書き慣れ ・取材
- ㉖ 何を書いているのか思い浮かばなくて、苦労した。課題が多くて大変だった。でも、作文の書き方がわかって為になった。（後半の指導に入って欠席多・・・筆者注）
・取材 (-) ・構成
- ㉗ 結構難しかった。段落を分けることに苦戦してしまった。でも、普段小論文を書くよりは話がまとまったと思う。
・構成 (-) ・選材
- ㉘ 四百字から八百字の文を作るとはやりやすかったです。最初に少しづつ目を書いて、それをどんどん大きくすることにより、いろいろな部分が思いつき、何回も読み返すことにより、何度も書き直したり、とても書きやすかったです。（時間をかけて書き直すことの効果がよく出ている。・・・筆者注）
・指導法 ・取材 ・推敲
- ㉙ 四百字から八百字になったときはうまく書けるか心配だった。自分はまとめるというのがうまくできない。二つの違いは書けたが、それを比べてまとめるとなるとうまくいかず、何回も書き直した。けれど、書いていくうちにとても楽しくなった。最初は二百字でも難しいと感じていたのに、四百字、八百字と増えていくうちにうまくいってあるなあと感じてよかった。増えすぎると大変かもしれないけど、八百字にするのはとても楽しかったのでよかった。
・選材 ・構成 ・推敲 ・書く姿勢 ・自己評価力
- ㉚ 二百字から八百字になったとき、自分はちゃんと書けるかと心配だったけど、自分の思ったことを素直に書くということでちゃんとした八百字の作文になることが分かりました。
・取材 ・構成 ・記述

⑪ 合評会欠席

B*⑫ 最初二段落で始めて、それを八百字にするのはいきなり八百字書くよりも、自分の考えが整理できてとてもよかった。何回も読み直す機会があるので、自分の変なところに気づくことができた。完成した自分の作品を読むと、自分でもこんなことを思っていたのかと少し驚いた。

・選材 ・構成 ・指導法 ・推敲 ・自己評価力

⑬ 作文はすごく苦手で、初めの頃は二百字書くのもやっとだった。でもしばらく二百字作文を書いて四百字になった時は思ったよりもスラスラ書いてびっくりした。私が自分の作文でよく書けたな・・・と思うのは「食事」の作文で、私はその作文をきっかけに作文っておもしろいものだな・・・と思えるようになった。そして、あるがままを書けばいいのだということに気づいたのもその作文を書いた時だった。この国語の授業で勉強したことを忘れないように、これからも役立てたい。

・指導法 ・書き慣れ ・自己評価力 ・書く姿勢 ・記述

⑭ 二百字から始まったのだが、二百字に馴染むと四百字がかなり難しくなると思った。さらに四百字から八百字は余計に難関だった。しかし、慣れると以前の小論文よりぐっと楽に書けるようになっていた。それに、ここまで文章を書くことがとても楽しいと思えるようになった。さらに、二段落を作ってから小論文へというやり方は、自分の考えをととてもまとめやすい。だからどこかで小論文が必要になったとき、この方法はとても参考になると思う。「国語」の授業がとても好きになりました。ありがとうございました。

・書き慣れ ・文章のジャンル ・書く姿勢 ・指導法 ・選材 ・構成

⑮ 私は文章を書くのが苦手で、どう書いたらいいのかわからなかったけど、一段落ずつ書いて、それに付けくわえていけばいいのがわかり、少しは文章がうまくなったと思う。何にもないところから書くより、四百字の文に付けくわえて八百字にする方がアウトラインも決まって書きやすかったと思う。

・取材 ・構成 ・指導法 ・自己評価力

⑯ 二段落作文から小論文を書いたのは、始めに二段落で書き慣れたせいも八百字になっても戸惑わず、すらすら書けるようになりました。

・書き慣れ ・取材 ・書く姿勢

⑰ ようやく四百字に慣れたとたんに八百字というのがとても大変だった。高校生の時も小論文を書いたが、少し書き方がわかったので良かった。みんなの文がとても上手で読むのが楽しかった。みんなの文を読んで、四百字より八百字の方が伝わる感じがたくさんあると感じた。

・文章のジャンル ・構成 ・自己評価 ・書くことの効用

⑱ 今までの作文は二段落とかあまり考えないで書いていたので、二段落作文とか四段落作文とか書くうちに、すこしずつ作文の書き方が分かってきたので良かったです。作文を書く上での決まりとかも気にして書くようになれました。

・構成 ・記述

⑲ 二百字から四百字になったときも、途中で何を書けばよいかわからなくなっていた。八百字もそうだ。何度も同じようなことばかりしか書けなくて大変だった。でも、自分が何について書きたいのか、きちんと整理して書けばきちんと書けることを知った。でも、自分の書きたいことを言葉にして表すのは難しかった。どの言葉が合うのか考えるのは楽しかった。一つの言葉でちょっと自分のイメージと違っていたり、ピッタリだったり楽しかった。

・選材 ・構成 ・記述

④ 一番始めに二百字で四百字とふくらませた内容を書いてきた為、書きたいことが分かりやすく書けるようになり楽しかったです。八百字（小論文）はまとめまで詳しくできたら最高です。

・指導法 ・取材 ・選材 ・構成 ・書く姿勢

④ 四百字でさえ書くのが難しかったのに、八百字になったことにより余計に難しくなって嫌だなあと思ったけど、実際八百字で書いたことにより、四百字では言えなかったことも八百字では言える。たしかに八百字になって何を書けばいいのか迷ったけれど、自分で納得（満足）できる文章が書けたのでよかった。

・選材 ・構成 ・自己評価

3-2. 分析結果と考察

41名中、合評会当日の欠席者が2名、無記入者1名。残る38名の記述内容から、今回の指導法を肯定的に評価したものと否定的なそれに大まかに分けると、34名が肯定で4名が否定であった。90パーセント近い受講生が積極的評価をしたことになる。

授業中は、赤ペン付で返却された原稿を読みながら考え込む学生が多く、筆者は添削時に原稿やアウトラインと向き合うだけであったので、これほど多くの好意的意見が出るとは予想しなかった。この結果から、今回の指導手順の手応えを感じることができた。

上記の感想内容を、すでに発表したアンケート分析とほぼ同様の方法（注3）で分析してみた。分析結果は、3. ですすでに該当項目を書き入れたが、それを項目別に集計して整理したものが次の二つの表である。その1は、集計数の多い項目順に並べたものであり、その2は、文章作成過程項目順である。

アンケート内容分析結果一覧表 その1

分類項目	分析結果
構成(段落・アウトライン)	24
指導法	19
取材(長さ)	14
書く姿勢	11
選材(主題の確定)	9
自己評価力	7
書き慣れ	7
記述技能全般(表記を含む)	4
推敲	4
文章のジャンル	2
書くことの効用	1

アンケート内容分析結果一覧表 その2

分類項目	分析結果
書く姿勢	11
取材(長さ)	14
選材(主題の確定)	9
構成(段落・アウトライン)	24
書き慣れ	7
記述技能全般(表記を含む)	4
推敲	4
指導法	19
書くことの効用	1
自己評価力	7
文章のジャンル	2

最も記述の多かった項目は、構成に関するもので24に登る。今回、特に指導に力を入れた段落の書き分けとアウトライン作成を含む分析項目である。「私はすごく作文が苦手

で、長い文章などろくに書けたことがなかったので、この四百字を八百字に広げるというやり方は私にとって書きやすかった」「先生から『こんな段落で書いてみてください』という説明があって、八百字書くのも楽しかった」「何にもないところから書くより、四百字の文に付けくわえて八百字にする方がアウトラインも決まって書きやすかった」などである。マイナス評価としては、「二段落から四段落に変えても同じようなことの繰り返しになってしまった」「四百字までは何とか書けるのだけれどそこからの展開が難しくてかなり苦勞した。まとまりのあるものが書けなかった」とアウトラインがうまく組み立てられなかった不満を記した二名がいた。

アンケートの問いでもある指導法に関するコメントは19と二番目に多く、ほとんどが好意的評価で「順序よくステップアップしていくとこんなに成長したのかと、自分でもびっくりした。八百字なんて無理だあきらめていた自分がどこかに行ってしまったかのように、少し自信が持てた」「四百字を八百字に広げるというやり方は私にとって書きやすかった。・・・スラスラできたので不思議だった」などがあつた。否定的なものは2名で、内1名は欠席がちの学生、もう1名はアウトラインの矛盾を指導者に指摘されたが、それを改善できないまま合評会を迎えてしまったことへの不満を記していた。

三番目は取材について14の記述があつた。「書くことが沢山出てきておかしかった」「自分の体験したことを多く入れることができたのでよかった」「少し雑目に書いて、それをどんどん大きくすることにより、いろいろな部分が思いつき・・・」というふうに、二段落を核としたことで、内容が無理なくふくらむ様子が記述されている。「長さ」への抵抗感が消えたと述べたものもある。マイナス評価としては「文をつけ足さなきゃで何を書けばいいのか一杯悩んだ」と「何を書いていいのか思い浮かばなくて苦勞した」の二つがあつた。

四番目は、「書く姿勢」に関するものが11ある。「落ち着いて書けた」「無理だとあきらめていた自分がどこかに行ってしまったかのように、少し自信が持てた」「けっこう楽しかった」「作文っておもしろいものだな・・・と思えるようになった」などである。

五番目は選材（主題の確定）、9である。「自分の考えが少しはできているので、そこからつけ足したりけずることができたので落ち着いて書けたように思う」「普通小論文を書くよりは話がまとまった」「・・・自分の考えが整理できてとてもよかった」「自分で何について書きたいのか、きちんと整理して書けばきちんと書けることを知った」などの記述があつた。文章表現での重要性という側面からは、構成に準ずる数字が欲しいところである。

六番目は「自己評価力」と「書き慣れ」で7つずつであつた。「自己評価力」では「文章がうまくなった」「みんなの文がとても上手で、読むのが楽しかった」「四百字、八百字と増えていくうちにうまくなっていったなあと感じて良かった」「自分の変なところに気づくことができた」「自分で納得（満足）できる文章が書けたのでよかった」などがあつた。「書き慣れ」には「何回も書いていく中で、文を書くということに抵抗がなくなり、

楽しくなりました」「だんだんと続けているうちに、二百字でさえ苦痛だったのが、すんなりと書けるようになっていったのですごいと思った」「慣れると以前の小論文よりぐっと楽にかけられるようになっていた」「始めに二段落で書き慣れたせいか八百字になっても戸惑わず、スラスラ書けるようになりました」がある。

七番目は、「記述技能全般（表記を含む）」と「推敲」でそれぞれ4ずつである。「記述」はこれまでのアンケートでは常に一位の数字を示してきたものであるが、今回は、指導のポイントではなかったため、この数字で問題はないが、「推敲」に関しては、今後もっと記述の数を増やす必要があるだろう。もっとも、今回は、八百字への展開は一度だけであったので、推敲のチャンスも少なかった。「何回も読み直す機会があるので、自分の変なところに気づくことができた」と記す学生のように、自ら気づいて訂正できることが望ましい。推敲指導は、今後さらに重視すべき点であると考えている。

八番と九番目は「文章のジャンル」と「書くことの効用」であった。小論文に関する記述、「高校生の時も小論文を書いたが、少し書き方がわかったので良かった」と「二つ段落を作ってから小論文へというやり方は、自分の考えをととてもまとめやすい」の二つがあり、「書くことの効用」としては「四百字より八百字の方が伝わるものがたくさんあると感じた」があった。後者に関しては「書くことで考えを深める」という観点からも、さらに指導に力を注ぎたいと考えている。

以上は、「アンケート内容分析結果一覧表その1」に基づいて集計数の多い順に考察を加えたが、「その2」に見られるように、アンケートの記述内容は、文章の作成、および指導のすべての過程を網羅する形で反応があるということを示している。

なお、今回は、二段落の対比をもとに主題文を導き、八百字に展開する一つの基本形に従った指導を貫いた。今後はこの基本形に加えて、構成上の変化に対応できる指導法を探りたい。

おわりに

学習者は、実に指導したとおりに学ぶものである。学習者が書けないのは、学習者のせいではなく、指導に問題があるのである。3回のアンケート分析を通して、そのことが裏付けられると同時に、各段階毎の指導のポイントが明確になった。

文章表現の指導は、体系化された指導手順に従って、段階的、反復的、重層的に継続されなければならない。指導者は、各段階での指導目標を明確にすると同時に、常に次の段階、さらには全体を見通した指導を心がけなければならない。一文一文の姿勢、一段落一段落の姿勢が、文章全体のテーマにつながる。学習者は、学習を続けることによってのみそれらを徐々に身につけていくのである。

短作文から長作文に発展させる指導の手始めに、二段落からの展開を試み、受講生の90パーセント近くに好意的な評価を得たことはうれしい結果であった。しかし、小論文指導への本格的な一歩は踏み出したばかりである。今回のアンケートからも、新たな指導ポイ

ントが見えてきた。これらを基に指導手順を一層効率化していくことが今後の課題である。

注

1)

①1999年3月「短期大学での文章表現指導－学習者の実態と願いを探る－」『国語教育学研究誌』第20号大阪教育大学国語教育研究室

②1999年3月「小論文の指導その1－学習者の実態調査をもとに指導上の問題点を探る－」上田女子短期大学紀要第22号

③2001年3月「小論文の指導その2－アンケート調査をもとに指導上の問題点を探る－」上田女子短期大学紀要第24号

2) 注1) の②を参照されたい。

3) 注1) の②③を参照されたい。

参考文献

- 永野 賢 1959 『学校文法 文章論－読解・作文指導の基本的な方法－』朝倉書店
- 林 四郎 1973 『言語教育の基礎論 1 文の姿勢の研究』明治図書出版
- 市川 孝 1978 『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 時枝誠記 1977 『時枝誠記博士著作選Ⅲ 文章研究序説』明治書院
- 市川 孝 1978 『新訂文章表現法』明治書院
- 木下是雄 1981 『理科系の作文技術』中公新書
- 全国大学国語教育学会編 1986 『国語科教育研究 4 表現教育の理論と実践の課題』明治図書
- 言語技術の会編 1990 『実践・言語技術入門－上手に書くコツ・話すコツ』朝日選書
- 森岡健二監修 1995 『新版文章構成法』東海大学出版会
- 中西一弘編 1996 『基礎文章表現法』朝倉書店
- 林 四郎 1998 『文章論の基礎問題』三省堂
- 代表編者中村明・編集委員杉戸清樹・半沢幹一
1999 『テキスト日本語表現－現代を生きる表現行動のために』明治書院
- 高橋昭男 2002 『仕事文をみがく』岩波新書
- 野口悠紀雄 2002 『「超」文章法』中公新書

